

韓国濟州市におけるフィリピン人移民の 社会関係に関する事例研究

永田 貴 聖¹

1. はじめに

1-1. 問題設定

本稿では、大韓民国・濟州島・濟州特別自治道濟州市を拠点として活動しているフィリピン人移民コミュニティ NPHI（仮名）や、主要メンバーの活動と社会関係の広がり注目する。そして、フィリピン人コミュニティ内において、複数の個人が展開する複数の活動が組み合わせられ、つぎはぎ的な関係を形成している過程を明らかにする。このような関係はコミュニティに集まるフィリピン人の社会関係の基盤となっている。

海外のフィリピン人移民たちは、期間移住労働や永住であることに関わらず、フィリピン人の約80%以上が信仰するカトリック教会においてフィリピン人の自助グループを形成する傾向にある（Mateo 2000, Okamura 1998, Tondo 2014）。フィリピン人のグループというのは、多くの場合、カトリック教会の関係者や教会関係以外の支援者なども範疇に入り、「フィリピン」というシンボルを基に集まる緩やかな社会関係群である。そのことから、それらは「フィリピン人コミュニティ」と呼ばれている。韓国においてもフィリピン人移民たちが集まり、多くの「コミュニティ」を組織している（永田 2020）。濟州市に在住するフィリピン人移民たちの多くは信仰の拠点であるカトリック教会に礼拝するなどのために集まっている。しかし、フィリピン人コミュニティ NPHI は、カトリック教会と関わりながらも、教会に拠点を置くのではなく、「多文化交流」などを掲げる団体など複数の組織と状況に応じて関わり、フィリピン人同士、フィリピン人と現地社会の人びとをつなぐ社会関係の媒介となっている。本稿では、このようなことを可能にしているコミュニティ内の主要メンバーである国際結婚移民女性たち数名が教会での移民支援活動や、他の多文化理解のための社会活動等に参加していることに注目する。

1-2. 本研究に位置づけと調査の概要

本研究は、筆者による韓国在住フィリピン人移民グループに関する研究の一つである。これまで筆者は、ソウル特別市鍾路区ヘファ洞にあるカトリック教会を拠点とするフィリピン人コミュニティおよび日曜日に行われるタガログ語ミサに参加するため、その周辺に集まるフィリピン人やフィリピン人の活動に関与する現地の人びとが形成する「フィリピン空間」、さらにそれらに派生してできるフ

¹ 宮城学院女子大学現代ビジネス学科 准教授 atsumasan@mgu.ac.jp

フィリピン人留学生や国際結婚移住女性などの社会活動に注目してきた(永田 2016)。こちらのカトリック教会で行われるタガログ語ミサは韓国で最も多くのフィリピン人が集まるミサとしても有名である。そのほか、忠清南道天安特別市のカトリック教会の英語ミサや、隣接するカトリック系の移民支援組織に集まるフィリピン人コミュニティについての調査を実施してきた(永田 2019)。本研究は、カトリック教会に集まるフィリピン人コミュニティやそれに派生して形成されている社会関係への考察に深く関連している。

さらに、本研究は徳之島における「離島」に定住するフィリピン人移民が実践する文化継承、フィリピン人ネットワーク、カトリック教会の集まり、介護職従事などへの検討(野入2019a、2019b、矢元2019、高畑2019、松田2019)と深く関連し、また、共同研究の一部である²。だが、本研究が注目するフィリピン人コミュニティはカトリック教会と関係しながらも、拠点としているのではない。また、野入など他の共同研究者の対象地域である徳之島と比較して、済州島は「離島」ではなく、かなりの人口規模がある「島嶼」地域である。

次に本研究における調査の概要について説明する。本研究では、カトリック教会の英語とタガログ語ミサ、ミサの後、教会施設内で行われるティーパーティーに集まる人びと、フィリピン人が関係する多文化支援団体での参与観察や、生活相談や労働問題などに直面するフィリピン人移民を支援する韓国人の教会関係者、多文化支援団体関係者、さらに、フィリピン人コミュニティの主要メンバーである数名の国際結婚移住フィリピン人女性への聞き取りなど文化人類学によるフィールドワーク調査に基づく方法により実施されている。そして、本稿では民族誌的記述が主に用いられている。調査期間は2016年8月から、2016年10月、2017年3月、2018年3月・9月、2019年2月まで、合計5回、1回の渡航につき約7~10日程度済州市に滞在し、断続的に実施した³。

1-3. 韓国・済州島済州市におけるフィリピン人移民たちの概要

まず、大韓民国における在留外国人数について説明する。2017年⁴、韓国の総人口約5178万人のうちの外国人数は約217万人であり、そのうち、フィリピン人は58,480人(女性27,265人、男性31,215人)である⁵。国籍別では6番目となっている⁶。同年、韓国・済州島・済州特別自治道の総人口は641,757人であり、済州市の総人口は472,399人である⁷。済州島全体の外国人登録者数は約2.1万人である。済州島全体ではフィリピン人登録者数は608人(女性438人、男性170人)で国籍別では6番目となっており、済州市では413人(女性274人、男性139人)となっている⁸。

² 日本学術振興会・科学研究補助金「島嶼への結婚移住をめぐる—比較研究」基盤C・社会学(野入直美・琉球大学准教授代表、2016~2018年度(16K04073)分担・高畑幸、矢元貴美・松田良孝・永田貴聖)。

³ 本研究は、注2の共同研究における成果の一部である。

⁴ 本調査の中間時期である2017年の統計を主に参照する。

⁵ 출입국・외국인정책통계연보2017(出入国・外国人政策統計年報2017)

<http://www.immigration.go.kr> 출입국 외국인정책본부(出入国外国人政策本部)(2019年6月28日検索)。

⁶ 中国籍約170万(うち約68万が朝鮮族)、ベトナム籍約17万、タイ国籍約15.3万、米国籍約14.3万、ウズベキスタン籍約6.3万、フィリピン籍と続く。

⁷ 국가통계포털(国家統計ポータル) Korean Statistical Information Service

<http://kosis.kr/index/index.do> (2019年6月28日検索)。

韓国におけるフィリピン人移民の特徴は、6割を占める男性の大半が期間移住労働者であり、3～4割程度いる女性の7割程度が国際結婚移民である。しかし、済州島や済州市では、男性より女性の割合が多く、女性の9割以上が国際結婚移民であり、韓国の中ではフィリピン人女性の国際結婚移住者が多い割合の地域となっている。

2. 済州市在住フィリピン人の社会関係

2-1. フィールドワークのはじまり

2016年10月、調査地である済州島済州市での調査がはじまった。しかし、文化人類学や社会学等でのフィールドでは、近年、情報通信機能である SNS (Social Networking Service) を利用し、実際にフィールドワークを実施する前に、調査地の重要人物や情報提供者と連絡を取る場合も多くなっている⁹。本調査は、筆者がソウル特別市での調査中に知り合った長年韓国に在住するあるフィリピン人移民から (永田 2016)、SNS を通じて、フィリピン人コミュニティ NPHI の主要メンバーである C さん (50代女性) を紹介されたところから始まる。2016年8月頃、筆者は現地調査に入る前までの2か月間、Cさんと頻りにやり取りをした。主な内容は、Cさんと筆者のそれぞれの済州市と京都市における活動についての写真交換のようなものであった。筆者からは可能な範囲で京都市において関わっているフィリピン人コミュニティの活動に関する写真を送った¹⁰。また、それぞれの自己紹介も行った¹¹。これらのやりとり、そして、済州市での現地調査では主にタガログ語と英語、わずかな韓国語が使用された。また、本稿においてこの後登場する人びとはすべてCさんから紹介されている。

筆者が SNS を通じて、別の人からの紹介されたフィリピン人移民とのやりとりを可能にしたのは、情報通信技術・機能に加えて、韓国国内のフィリピン人コミュニティで活動する人びと同士には緩やかなネットワークが存在することである。韓国国内の様々な地域で展開されているフィリピン人コミュニティで活躍する移住者たちはある程度つながっているのである。これらは、フィリピン大使館のフィリピン人移民の問題に取り組む担当者や、フィリピン人コミュニティが拠点となることが多いカトリック教会の聖職者によって把握されている。例えば、在韓国フィリピン大使館は約60近くの地域の宗教、職業者系のフィリピン人グループを登録し、WEB サイトにて公表している¹²。また、ソウル・



教会の聖堂

⁸ 注5と同じ。

⁹ この点については小川 (2021) を参照されたい。

¹⁰ 同時期、筆者が京都市において実施した研究活動は永田 (2017) を参照されたい。

¹¹ ところが、タガログ語でやりとりしていたこともあり、Cさんは筆者を日本在住のフィリピン人研究者と思いつ込んでいた。

¹² http://www.philembassy-seoul.com/filipino_community.asp (フィリピン大使館) (2020年3月8日検索)。

ヘファ洞にあるカトリック教会のフィリピン人司祭はカトリック教会を拠点とするフィリピン人コミュニティの連絡網を作成している¹³。

2-2. カトリック済州教会に集まるフィリピン人とその周辺

2016年10月、筆者は先述したように、SNS を介してある程度連絡を取り合った後、済州島済州市でのフィールドワークを開始した。済州市に到着した翌日、C さんに連れられ礼拝のために毎週通っているカトリック済州教会（仮名）の英語ミサに参加した。毎週日曜日の昼、この教会の地下にある小聖堂で行われる英語ミサには50名近い人びとが集まる。その大半がフィリピン人である。結婚移民女性が多く、男性の労働者やフィリピン人留学生、韓国人男性配偶者や子どもたちもいる。通常、ミサは韓国に20年以上在住しているアイルランド人司祭のよって行われる。教会内には移民センター（仮名）がある。そこには韓国人の支援員である K さん（50代男性）、さらにセンターの仕事を手伝う韓国在住10年以上になるドイツ人シスターがいる。C さんは、移民センターで K さんとともに主にフィリピン人移住労働者や他の結婚移民の支援のための通訳などを無償で手伝い、活動に深く関わっている。ミサの終了後、毎週、聖堂の横のビルに移り、ティーパーティーが行われ、ミサに来た人びとはそれぞれの近況などを1～2時間ほど雑談した後、それぞれの家路につく。このような風景は、世界中のフィリピン人が集まるカトリック教会では見慣れたものになりつつある。また、2019年2月時点で、この教会では、英語ミサとは別にタガログ語、ベトナム語、東チモール人移住者向けのミサが行われる。済州島内では、済州教会以外に、西帰浦（ソギポ）のカトリック教会にもフィリピン人が集まっている。



教会の外国語ミサと医療サービスの案内

2-3. 済州市と周辺のフィリピン人コミュニティとカトリック教会の移民センター

たいていの場合は、カトリック教会を拠点とするフィリピン人コミュニティが存在する。しかし、フィリピン人コミュニティである NPHI はカトリック教会を拠点としているわけではない。NPHI は、国際結婚移民女性たちを中心に2011年頃に結成された。100人程度の登録メンバーがおり、独立記念日やクリスマスパーティーなどのイベントなどには30～40人のフィリピン人たちが集まる。主に、NPHI は、済州市中心部を拠点としている¹⁴。これらのメンバーの多くがカトリック教会の英語ミサに参加しているが、カトリック以外のメンバーも多い。

主要メンバーは20人程度で、2年おきに選挙があり、10名程度の幹部メンバーが選ばれる。代表は

¹³ Sambayanan June–July, 2013

¹⁴ 他にも西帰浦（ソギポ）市を拠点するコミュニティ、西元（ソウォン）を拠点する2つのコミュニティがある。この2つのカトリック教会との関わりは今後の課題とする。

2期4年まで連続してできる。高額ではないが会費制である。会員は国際結婚移民の女性たちが中心であり、期間滞在の移住労働者の男性たちは活動には参加できるが、正式な会員にはなれない。Cさんはこのグループの代表ではないが、中心人物として活動している。代表のTさんは50代の女性で、国際結婚のため韓国に移住し、釜山で約10年暮らした後、済州市に10年程度居住している。現在、大学生になる2人のこどもは半島におり、韓国人の夫と2人で暮らしている。2018年時点で代表を4年務めたので、今回はもうやらないとのことである。カトリック信徒ではなく、プロテスタントの教会に通い、カトリック教会のミサには来ない。カトリック信徒であり、移民センターに深く関わっているCさんとは常に連絡を取り合っている。また、Tさんは済州市でインド料理店を営んでいるネパール人店主など他国出身の移住者やグループなどとも親交がある。NPHIがカトリック教会に拠点を置かない理由の一つは、Tさんのように、カトリック信徒ではなくイグレシアス・ニ・クリスト¹⁵や統一教会、その他のプロテスタント教会の信者が一定数いることへの配慮もある。

NPHIの主な活動は、①年に1回開催されるフィリピン大使館によるワークショップの受け入れ、②年に4回程度、季節ごとの親睦イベント（遠足やスポーツ大会など）やクリスマスパーティー、③月に1回の幹部メンバーによる定期会合である¹⁶。ワークショップの内容は、韓国に在住するフィリピン人が関係する在留資格など制度についての変更や、大使館への韓国在住者向けの電話相談サービスなどの説明に関する集まりである¹⁷。特にTさんはフィリピン大使館の担当者とやりとりを行い、ワークショップを実施に力を入れている。

2004年、カトリック済州教会内に設置されている移民センターが組織され、活動を開始した。同時に、教会では英語ミサが行われるようになった¹⁸。活動は主に、先述した韓国人支援員のKさんとドイツ人シスターが担っている。また、Cさんもタガログ語-韓国語の通訳などフィリピン人からの相談を担当している。主な活動は、①移民・国際結婚家族の健康医療に関する相談支援、②移住労働者からの労働相談、③信仰に関わる活動（外国語によるミサの準備と推進、現在では英語、タガログ語、ベトナム語、東チモール出身者対象）である。同センターは、カトリック信徒だけを対象にしているのではなく、相談があるすべての移住民を対象としている。相談が多いのはフィリピン人、インドネシア人、ベトナム人、スリランカ人などであり、その多くが移住労働者である。また、2018年3月・9月の調査時には済州島に到着したイエメン難民への食糧提供などの支援も行っていた。しかし、移民センターは出身国別や地域別の自助グループなどの組織化を推進することは行っていない¹⁹。

そして、フィリピン人コミュニティNPHIのメンバーや、会員ではないがコミュニティと関係が深いフィリピン人たちはカトリック信徒であることないことに関わらず、生活や緊急時の相談をカトリック教会の移民センターに行う。また、フィリピン大使館のセミナーは2017年までは移民センターで行っていた。2018年以降は別の場所で開催している。

¹⁵ フィリピンを拠点とするキリスト教系新宗教である。寺田（1982）を参照されたい。

¹⁶ 2018年9月9日Tさんへの聞き取り調査から得た情報をまとめた。

¹⁷ フィリピン大使館は韓国国内にあるフィリピン人コミュニティをできる限り巡回している。

¹⁸ K氏提供内部資料から許可を経て一部を掲載している。

¹⁹ 海外からの移住者の自助グループ活動への支援は移住労働者支援団体が行っていた「移民共同体耕し」という運動がある。ここではこれ以上触れない。詳細はベル（2016）を参照されたい。

2-4. NPHIの主要なメンバーの動向と社会関係

フィリピン人コミュニティ NPHI が、カトリック教会を含むさまざまなグループと関係している大きな要因は、主要メンバーとして C さんが活動していることである。C さんは50代の女性で T さん同様に国際結婚のため韓国に移住した。韓国在任約20年であり、10年前に済州島に移住した。中学生になる子ども、韓国人の夫と3人で暮らしている。すでに述べたように、済州に移住後、移民センターのフィリピン人からの相談を通訳することを手伝うなど、韓国人支援員の K さんと共に活動することが多い。また、C さんは、済州島の公立小中学校などに海外の文化や、食、生活習慣などを紹介する授業を行う済州多文化教育センターの巡回非常勤講師として働き、フィリピンを担当している。その他にも、宗教系の多文化家族支援などの施設において、フィリピン人結婚移民女性向けの韓国社会への適応セミナーや、韓国人向けのフィリピン文化理解の講座などを非常勤職として担っている。これらの施設では「日本」向けの企画を担当する同僚もあり、調査中、C さんはそれらの日本人をよく紹介してくれた。

2-5. 活動の変化

2017年以降、フィリピン人コミュニティ NPHI の活動が徐々に変化しつつある。C さんが本業のフィリピン文化理解講師関連の仕事で知り合った済州多文化教育センター（仮名、以下、多文化教育センター）との連携である。このセンターが開設されたのは2016年である。その前身は、1990年代後半に在外済州人の情報などを集約する団体として組織された²⁰。2016年以降は、在外済州人の情報収集と済州の歴史を振り返る活動と並行して、済州島在住外国人向けのパソコン教室や社会適応のための講座、多文化交流のための野外イベントなどを開催している。

2018年、NPHI は多文化教育センター内の空いていた部屋に事務所を開設した。その後、NPHI は、①月に1回センターが実施する高齢者対象給食サービスへのボランティア参加、②多文化教育センター主催の野外イベントでのフィリピン料理ブース出店、③フィリピン人結婚移民女性を対象としたパソコン教室開催、④年に1、2回、フィリピン人移民とその家族（多くが国際結婚家族で韓国人配偶者も対象）、フィリピン人移住労働者を対象とする島内名所を巡るエクスカージョン、などの活動を行っている。また、2018年以降先述した年に1回開催されるフィリピン大使館によるワークショップは、同センターで開催されるようになった。

NPHI の活動は、拠点を得た以降、これまでの親睦を中心とするそれぞれの人間関係をつなぐ活動に加え、集まり、時間を共有するようになるようになった。例えば、2019年2月に実施したフィールド調査では、同センター内にある NPHI の事務所で次期の幹部メンバーを選ぶ選挙を、土曜日と日曜日の昼間の数時間投票所を開設し、実施した。開票作業も投票を締め切った翌日に事務所内で行われた。以前であれば、このような作業を行う場所を借りるか、カトリック教会内の移民センターで行っていた。しかし、そうなるとカトリック信徒ではないフィリピン人たちが来ない可能性がある。こちらではそのようなことはない。

²⁰ 所長の O 氏は大阪の済州島出身者の状況によく精通していた。

そして、多文化教育センターにとっても、外国人向けの企画を実施する場合に、主な対象をまずはフィリピン人移民や移住労働者にすることによって、外国人移民が生活する上で、いったい何を必要としているのかを理解しやすくなった。また、多文化教育センターの担当者たちは必ずしも外国人移民の対応に慣れているわけではない。韓国での在住が長く経験豊富で、韓国語が堪能な C さんや T さんのようなフィリピン人が関わることによって、同センターの活動企画が容易になり、企画を実施した後の反省や改善にもつながっている。

また、カトリック教会の移民センターも C さんを通じて、NPHI は多文化教育センターと協働して活動を行っていることを知り、それを歓迎している²¹。移民センターは、外国人労働者が直面する雇用者の不当行為や、結婚移民女性が直面する家族からの暴力など緊急性が高い問題に対応しているが、それ以外の活動では、健康相談や無料医療活動を実施するのが資源的に限界である。そして、2018年～2019年頃はイエメンからの難民への支援活動に追われていて、フィリピン人との協働はあまりできていないという状況だった²²。フィリピン人自助グループである NPHI がさまざまな団体やグループと関係結び、状況に応じて、使い分けていくことで活動が活性化される可能性を備えている。言うまでもなく、これは C さんが移民センターの支援員 K さんと常に連絡を取り合っていることが大きい。

3. まとめと今後の展望

本稿では、フィリピン人コミュニティがカトリック教会と関係しつつも、拠点を教会には置かず活動を展開することを考察してきた。韓国国内において、多くの場合、フィリピン人コミュニティはカトリック教会を基盤の中心として活動を行う。その場合でも、数は決して多くないカトリック信徒以外のフィリピン人がコミュニティに参加することがある。しかし、参加することを躊躇する場合もある。これまで焦点を当ててきた NPHI はフィリピン人移民や移住労働者の多くがミサに参加するなどのためにカトリック教会に集まりつつも、カトリック教会の外部に拠点を設け、コミュニティと信仰を分離させている。主要なメンバーの個人的関係を活用しながら状況に応じて、活動する場を使い分けてきた。これはまさにつぎはぎ的な関係を応用する実践であると言えるだろう。

しかし、これはあくまでも2019年2月までの状況である。その後、もうここで触れることではないが、新型コロナ・ウィルス COVID-19の世界的な感染拡大により、フィリピン人コミュニティの活動そのものも大きな制約を受けている。しかし、筆者が知る限り、メンバーたちは SNS などで頻繁に連絡を取り合い、親交を継続している。感染が沈静化すれば、フィリピン人コミュニティの活動そのものはどういう形なるかは状況にもよるが、復活するだろう。

今後の課題となるのは、フィリピン人コミュニティ NPHI がどのようにカトリック教会や、多文化教育センターと関わってゆきながら、活動を展開するかであろう。カトリック教会の移民センターとの関係は、信仰という、精神的な支柱となるものがかわっているので、それほど変化することがあるとは考えられにくい。ただ、多文化教育センターとの協働はどこまで継続されるのか未知名な部

²¹ 2019年2月24日フィールドノートから。

²² 2018年9月11日、2019年2月23日フィールドノートから。

分が多い。本稿ではあまり触れられていないが、多文化教育センターは2000年以降から急速に実施されるようになった韓国の「多文化社会」推進のための行政からの何らかの補助を受けている。これらの補助が継続されるかされないかで、協働のあり方も変化するだろう。

また、2019年のフィリピン人コミュニティ NPHI の選挙では、これまで代表であった T さんが退き、世代交代を進めようとしている。もちろん T さんはコミュニティにはとどまるが、T さん C さんともに若い世代に遠慮して、活動への関与を抑制するかもしれない。1990年代後半から、2000年代にかけて、韓国では労働組合や外国人移住労働者、そして海外からの移民による外国人移民への権利拡大のための社会運動が活発に展開された。韓国において、フィリピン人コミュニティ活動を担ってきた中心人物たちの多くは、1986年2月に起こったフィリピン2月革命を経験し、その前後でフィリピン国内において活発になる社会運動の高まりを大なり小なり経験した世代である²³。これらの世代が海外での移住先においてもフィリピン人自助グループの活動に携わってきた。また、済州での C さんや T さんのように現地のフィリピン人への理解者である K さんや O さんのような人びとと人間関係を作り、信頼を深めることできるかも重要である。新しい世代はそれらを継承し、発展させることができるかにかかってくるだろう。NPHI の活動に今後も注目してゆきたい。

筆者は引き続き、済州島だけではなく、COVID-19後の韓国におけるカトリック教会を基盤とするフィリピン人自助コミュニティ、他のものを基盤とするコミュニティのあり方の変化について追跡する必要がある。

(参考文献)

・日本語文献

小川さやか.

2021 「エスノグラフィ」『文化人類学のエッセンス—世界をみる/変える』（春日直樹・竹沢尚一郎 編）、pp.239-257、有斐閣。

高畑幸.

2019 「離島におけるフィリピン人結婚移民の定住と職業生活—1990年代に来日した女性たちの介護職への従事」『移民研究』15: 15-26、琉球大学沖縄移民研究センター

寺田勇文.

1982 「イグレスシア・ニ・クリスト—フィリピンの新宗教運動の一事例」『東南アジア研究』19(4): 426-441。

永田貴聖.

2016 「日本・韓国のフィリピン人移民たちによる複数の国家・国民とかかわる実践」『「国家」を超えるとは—民族・ジェンダー・宗教』（黒木雅子・李恩子 編）、pp.151-199 新幹社。

永田貴聖.

2017 「巻き込まれてゆくことからみえる在日フィリピン人移住者たちの社会関係」『異貌の同時代—人類・学・の外へ』（渡辺公三・石田智恵・富田敬大 編）、pp.309-338 以文社。

永田貴聖.

2019 「送り出し社会と移住先社会の構造と規範のなかで生きるフィリピン移住者の戦術」『共生社会の再構築 I シティズンシップをめぐる包摂と分断』（大賀哲・蓮見二郎・山中亜紀 編）、pp.129-145、法律文化社。

永田貴聖.

2020 「2つのトランスナショナル—フィリピン人移民研究からの視点」『移民研究年報』26: 51-64。

²³ この点は個々ではこれ以上議論できない。しかるべき時期に検討することとしたい。

野入直美.

2019a 「島嶼におけるフィリピン女性たちのネットワークとリーダーシップ—徳之島、宮古島、石垣島の比較」『移民研究』15: 27-38。

野入直美.

2019b 「序文（特集「島嶼への結婚移住をめぐる比較研究—フィリピン人を中心に）」『移民研究』15: 1-2。

松田良孝.

2019 「カトリック石垣教会60周年記念誌にみる 沖縄県石垣市在住フィリピン人の状況」『移民研究』15: 39-53。

矢元貴美.

2019 「徳之島に暮らすフィリピン人女性の子どもの進路とフィリピン文化の継承」『移民研究』15: 3-14。

ベル裕紀.

2016 「通り過ぎること、埋め込まれること—韓国安山市におけるカンボジア人移住労働者団体の設立過程を事例として—」『年報人類学研究』6: 104-131。

・外国語文献

Mateo, Ibarra.

2000 “The Church’s Nonreligious Roles Among Filipino Catholic Migrants in Tokyo.” In C. J-H. Macdonald & G.M. Pesigan. (eds.), *Old Ties and new solidarities: studies on Filipino communities*. Ateneo de Manila University Press, 192-205.

Okamura, J.

1998 *Imaging the Filipino American Diaspora: Transnational Relations, Identities, and Communities*. Garland Publishing.

Tondo, Josefina S. C.

2014 “Sacred Enchantment, Transnational Lives, and Diasporic Identity: Filipina Domestic Workers as St. John Catholic Cathedral In Kuala Lumpur. *Philippine Studies: Historical and Ethnographic Viewpoints* 62 (3-4): 445-470

・雑誌

Sambayanan June-July. 2013

・WEB サイト（検索日は注に掲載）

Embassy of The Republic of The Philippines in Republic of Korea（在韓国フィリピン大使館）<http://www.philembassy-seoul.com>

국가통계포털（国家統計ポータル）<http://kosis.kr/index/index.do>

출입국 외국인정책본부（出入国外国人政策本部）<http://www.immigration.go.kr>

謝辞

この調査に協力してくれた済州市のフィリピン人移民であるCさん、Tさん、そして、移民センターの支援員のKさん、多文化教育センター所長のOさんを含むすべての済州の人びとに、そして、このような研究を行う機会を作っていただいた共同研究代表者である野入直美先生に感謝を申し上げます。